



TITLE:

清代四川の移民經濟

AUTHOR(S):

森, 紀子

CITATION:

森, 紀子. 清代四川の移民經濟. 東洋史研究 1987, 45(4): 775-802

ISSUE DATE:

1987-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154175>

RIGHT:

清代四川の移民經濟

森 紀 子

はじめに

一 開墾政策

二 川東（藥材、鹽、石炭）

三 川南（砂糖）

四 川西（紅花、タバコ）

おわりに

はじめに

「解手^レ」という中國語がある。大小便の用を足すという意味あい、その昔、手をくぐられた囚人が、用を足す時にのみ手をゆるめてもらったことに語源があるという。かなり一般的に使用されることばであって、方言ではないということであるが、四川の民間傳説では更に解釋が加えられる。すなわち、この手をくぐられた囚人とは、湖廣から送られてきた人々であるというのだ。⁽¹⁾

明末、張獻忠の屠殺により、四川では人口に激減をきたした。そのため、清初、湖廣から大量の人開が四川に遷移してきたという通説がある。いわゆる「湖廣填蜀」であるが、先の解手の由來も、これにひっかけて説かれているわけである。

省 區	平均人口數(畝)
直隸	4.7
陝西	4.1
江蘇	2.8
安徽	1.7
江西	4
福建	1.8
湖北	7
湖南	3.9
廣東	4.9
四川	15.6

四川の人口激減の原因が、果して張獻忠の軍にのみあったかどうかは、大いに問題とされているところであるが、この傳説には、農民反亂の参加者が歸農させられる姿、あるいは強制的に回籍させられる流亡四川人の姿が反映されているともいわれる。傳説はひとまずおくとしても、清初の四川において、相対的な人口減があり、大量の移民活動がみられたことは、紛れもない事實であつた。

乾隆三十一年（一七六六）を例とする各省別の田土、人口、毎口平均耕地數の統計がある。参考までにその一部を引用してみよう。⁽²⁾ これを見れば、清初の四川について盛んにいわれた「地廣人稀」という形容は、確かに數字としても表現されうるのである。

清初の四川への移民活動については、我國にも言及はある。最初、それは嘉慶の白蓮教徒の出自が移民であることへの關心から始まった。移住地としては、白蓮教徒の根據地ともいふべき三省（陝西、湖北、四川）交界地帯、すなわち、四川に限っていえば、川東、川北の山區が注目された。

そして移民の經濟生活といへば、常食とされるトウモロコシ栽培と養豚のサイクルで把握されるのが一般であつた。移民⁽³⁾白蓮教徒、土着⁽³⁾非教徒といった圖式すら想定され、いずれにしろ白蓮教徒の問題としてのみ考察されていたのである。

筆者自身の移民への關心は、四川の鹽業に関する考察から始まった。鹽都自流井を代表する鹽業資本家王三畏堂、李四友堂、胡勉齋。自流井と並稱される樂山五通橋の鹽業資本家吳景讓堂（郭沫若の八妹が嫁している）。いずれも先世は外籍であつた。⁽⁴⁾ しかも彼らは、川南において、極めて積極的な經濟活動を営んでいるのである。

思うに白蓮教徒の問題からのみこの時期の移民を考えることは、いささか視野が狭く、そこからは限定的で、消極的な

移民の姿しか導かれないのではなからうか。本稿では清初における四川への移民活動そのものを、できるだけ具體的、包括的に考えてみたいと思う。

一 開墾政策

順治三年（一六四六）、川北より入川した清軍が、四川全省を版圖に入れ得たのは、やっと康熙元年（一六六二）のことであった。しかも、續く吳三桂の亂の平定をみる康熙二十年（一六八二）⁽⁵⁾まで、兵火はなおやむことなく、「沃野千里」「天府の國」と稱されたその土地も、「狐狸豺虎の游する所」と形容される荒廢ぶりを示すに至ったのである。

清朝においては、激減した戸口の回復をめざし、戦火を避けて、陝西や湖廣等の他省に逃れ去った、「流寓川民」の回籍が求められたことはもちろん、「招民開墾」の問題が急務として、早くから論議の俎上にのぼっている。

まだ川北の平定をみるのみであった順治十一年（一六五四）、早くも兵民に牛種を官給する屯田政策がとられていたが、開墾政策をより效果的に實施するため、招民に力のあった官員には一級を加え（招民三百戸を目安とする）⁽⁷⁾、清初の通例として、開墾三年後に起科されるものを五年ないし六年とするなど、様々な獎勵策もとられていた。そして、康熙十年（一六七二）には入蜀墾荒者の入籍が、康熙二十九年（一六九〇）にはその子弟の入籍考試が認められていた。⁽⁹⁾

こうして、四川移民の大きな波が清初に現われるのであるが、移民の入蜀がすすむにつれ、彼らと先住者との間には、軋轢もまた、當然のように發生してきていた。康熙中、蜀人李先復が次のように陳述している。

臣は蜀人にかかる。伏して念うに、巴蜀の界は、秦、楚に連なり、地既に迂闊たり。兩省失業の民、近きに就きて入籍墾田し、地方を填實し、漸やく賦税を増し、國計、民生、豈兩つながら攸頼あらずや。乃ち、近ごろ楚省の寶慶、武岡、沔陽等處の人民、或いは罪を以て逃れ、或いは欠糧を以て懼比、名を開荒に托して家を攜え入蜀する者あり。數十萬を下らず。その開果して開墾を以て業となすもの固より人に乏しからず。而して奸徒匪類、地方を擾害し、則

ち人の已熟の田地を占むる者あり、人の祖宗の墳墓を掘る者あり、糾夥して竊をなし盜をなし、虐を肆しいまみにし劫を行ふ者あり。黨を結びて兇毆し、強に倚りて健訟す。又私かに會館を立て、凡そ一家事あれば群兇橫行し、此に告げ彼に誣し官府を挾制する者あり。⁽¹⁰⁾

移民の出身地は、湖廣、江西、廣東、福建、陝西等各省にわたる。しかし「湖廣填蜀」のことばがあるように、中でも鄰接の湖廣からの移住者が壓倒的多數にのぼっていた。それは各地方志の記載にも如實に反映されている。數が多いだけにトラブルの發生も目につきやすかったのであろうか。この一文は湖廣の入蜀者による害を端的に指摘したものであるが、康熙帝の上諭にも同様の認識がみられる。

諭して曰く、湖廣、陝西は人多くして地少なし。故に百姓皆四川に往きて開墾す。聞くに陝西入川の人は各自耕種し、分に安んじ營生す。湖廣入川の人は毎々四川人と爭訟す。四川人の深く怨むゆえなり。⁽¹¹⁾

陝西からの移民に較べても、湖廣からの移民は何かと悶着を起しやすいのである。

湖廣の民の四川に往きて地を墾する者甚だ多し。伊去る時、原賣の房產、地畝を將つて悉く變賣を行い、四川に往きて地を墾す。滿五年の起徴の時に至りて復た湖廣に回り、原賣の房產、地畝を將つて爭告する者甚だ多し。⁽¹²⁾

これらの記事に見る限り、湖廣よりの移民は、故郷の家屋、田畑を賣り拂つて資本とし、四川に移住開墾するのであるが、いざ徴税の開始される時期になると、納糧をきらって原籍に歸つてしまう。故郷に歸れば歸つたで、既に賣り拂つたはずの自分の不動産に關してもめごとを起すという、なかなか計算高いしたかなものがある。これでは開墾も、免稅期間を有効に利用した出稼ぎといった趣むきであり、ましてその中には、他人の耕地や、墓地を開墾してしまふ不心得者までいたとすれば、土着の四川人と摩擦を生じるのも無理からぬことではあるが、この湖廣出身者に代表される移民の性格、すなわち、飽和感のある原籍から、いくばくかの資本を持ち、短期的な收益をめざす、いわば目的意識のはっきりした性格は、この時期の四川移民を考察するにあたり、注目しておかねばならない。

下つて雍正六年（一七二八）の上諭にも、四川移民への言及がある。

内閣の上年聞するに、湖廣、廣東、江西等省の民は、本地歉收、米貴きに因り、相率いて四川に遷移するもの、數萬人を下らず。已に四川督撫をして法を設け安插せしめ、所を失わしむること毋れと。ただ思うに、上年、江西は收成頗ぶる好し、即ち湖廣、廣東もまた歉歲にあらず。近水の地の略淹損^{ウツ}を被むるに過ぎず。何ぞ居民の輕がるしくその郷を去るもののかくの如きの衆きを至さん。

その故郷において大きな自然災害があつたわけでもなく、否、豐作の所すらあるのに、遠く江西、廣東からまで、敢えて四川に移住していく者が多いということは、雍正帝の理解に苦しむところであつた。各省から寄せられる上奏にかんがみて、雍正帝が達した移民の理由とは、次のようなものであつた。

川省は曠土本より寛く、米多く價賤しきに因りて無知の民は、平日既に利に趨るのを見を懷く。又傳説する者あり。謂うに川省の米は三錢もて一石を買うべしと。又一種、包攬、棍徒あり。極言するに川省は日を度るに易し。一たび入籍すれば便ち富饒たる可しと。愚民その煽惑を被り、獨り貧しき者のその術中に墮ちるのみならず、即ち業を有する者もまた、産を鬻ぎ、以て富足を計る。⁽¹³⁾

すなわち、「地廣人稀」といわれる四川では米價が安い。四川に入籍すれば富裕になれるという傳聞が相當に流布され、利に走る人々が殺到したというのである。單に食いつめた流民というだけではなく、有産者がまた移住の波にのつていたという指摘は十分注目に値しよう。

雍正帝は、一省にかく人々が雲集すれば、再び人口の増加を招き、低い米價も騰貴するといつて移住の輕舉を戒しめるのであるが、趨利の移民を引きつけたものが、安價な糧米であつたということは基本とするにしても、果してそのみに終始することであつたらうか。大量の移民を吸収しえたものが何であつたのか、個々の移民の具體例にそくして、より幅広い考察を加えてみよう。

移民のルートは、陸路もさることながら、水路によるものも大きい。湖廣、江西からの移民が長江をさかのぼって川東に入ってくるのは當然として、廣東からの移民も、一たん湖廣にでたのち、やはり長江をのぼってくる。そして川東にとどまるのみならず、重慶からさらに嘉陵江に沿って川北へと入っていく⁽¹⁴⁾。

また、長江を重慶より更にのぼれば、瀘州から沱江に沿って、あるいは宜賓から岷江に沿って、それぞれ川西（成都平原）に入っていく。移民の足跡は、いわゆる三省交界の山區のみならず、四川盆地をほぼおおっているといえよう。しかし本論ではその全てに言及する餘裕はないので、以下便宜的に、當時の呼稱に従って、川東、川南、川西のそれぞれに屬する數縣について、移民の實態をみていこう。

二 川 東（藥材、鹽、石炭）

湖北から長江をのぼって四川に入れば、程なく有名な三峡に至る。三峡をこえ、やがて萬縣に達するという手前に、雲陽縣がある。縣城は長江の北岸に、江に面して建つが、その境域は江をはさんで南北に伸びている。

「明季大亂の後、戸の彫耗を見る。天下既に定まり、始めて大いに吳楚の民を遷し以てこれを實たす⁽¹⁵⁾」といわれるように、乾隆三年（一七三八）、三千六百六十七戸と把握されていた雲陽縣の戸數が、嘉慶元年（一七九六）には三萬三千九百五十一戸と十倍近い増加ぶりを示しているのも、移民があずかって貢獻しているのであるが、なかんづく、「遠人、簞を擔いて入川し、多く殷阜を致す⁽¹⁷⁾」と、移民には經濟的な成功者が多かった。

民國の『雲陽縣志』には、縣内の大姓百七十八族をあげ、その原籍、始祖、遷徙の時期などを列記しているが、それによる限り、大半は移民で、土着とみなされる者（明代の移民を含む）は三十六戸にすぎない。割合にして三一%ほどである。

概して土着の者は、明初に入蜀してきたと自稱しているのであるが、その耕作地に關する（地）券も持たぬ。縣内には

雲陽縣氏族表

始遷時 原籍	清以前	順治	康熙	雍正	乾隆	嘉慶	道光	不明
湖北	24	2	17	3	25	3	1	2
湖南	1	3	9	3	8	5		
江西			1	1	5	1		
福建			1		3	1	1	
東川			1	1	1			
廣西	2	2	1		1	1	1	
四川	6		6	5	11	2	1	
その他	3							13
不明								
計	36	7	36	13	54	13	4	15

——民國『雲陽縣志』卷23族姓より

扶、徐、向、冉、楊、譚といった氏族が残存しているが、當初、頗ぶる移民（客民）を仇視し、互いに交流し、婚姻關係を結ぶようになるまでは長い期間が必要であった。土着の性は質樸で、讀書とは縁遠く、識字も書券が讀め、欺むかれなければ十分とし、専ら農耕にいそしんでいる。⁽¹⁸⁾

大略このように表現される土着は、すでに移民に壓倒されている氣配である。では移民はどのような形で入川し、富裕化していったのであろうか。二、三の例をみてみよう。

李茂亮 湖南邵陽人。康熙四十四年（一七〇五）、縣北に移住。居を定めたのち湖南の父母、弟を迎える。荒地を買い佃戸を招いて墾植させ、數十年の内に數十里に渡る沃地を獲得して、大族となった。⁽¹⁹⁾

曾毓璉 湖南臨湘人。康熙末、父母とともに遠縁の李氏を頼って雲陽にやつてきた。李氏は同郷の鄰人であったが、二年前に入蜀していた。すでに佃田耕作をし、妻もあり、彼らを疎んじたため、他所へ去ろうとしたがあてもない。門外にすててあった豆がらをもらい、ふるって五升の餘粒をえ、荒地數畝を譲りうけた。晝間は傭工として働き、夜は荒地を開墾し、瓜を植えた。數年間て十餘石にもなった瓜の種を湖南に運販し、湖南の土産を四川に持ち歸った。ともに高値で賣れ、十年もするうちに田數十畝、宅地數十區を手に入れ、縣北の大姓となった。⁽²⁰⁾

彭光圭 湖北大冶人。乾隆七年（一七四二）の移民。油菓子（膏圓、寒具）を賣るのを業としていた。後に人のために陂塘を濬え、次第に殷阜となった。子孫の代には購入した田産は數縣に連なり、入穀は萬石にのぼった。世々弓馬を習い、武科に供職した者が多い。縣南西鄙きつての大姓となる。⁽²¹⁾

これらの例をみると、李茂亮は資本を攜えていたのであろう。最初から荒地を買い、招佃しているが、他の例では、行商や傭工をして小金をため、土地を購入してからも、開墾をすすめる一方で商賣もする、いわば農商兼行というスタイルをとっていることが認められる。これは當時の移民の典型的なあり方といつてよい。

もともと土着のものは田契も所持していなかったといわれている位である。所有關係の曖昧な土地も多かったであろうし、五升の豆で荒地數畝を譲りうけたという話のあることを思えば、土地の價格も、佃租も低かったことは十分伺える。⁽²²⁾佃戸であっても、山地に雜植することにより、餘剩利益を蓄積し、⁽²³⁾やがて土地を購入することも可能であった。

佃、餘利あること久しく、また田を買い富人と作る。而して佃を爲すこと故の如し。他農百計もて營奪せんとするも、固より動かす可からず。數世相安んじ、視いて己が産と同じ。租は歲に交せず。⁽²⁴⁾

土地を購入してからも、今まで通り、佃作を續け、數代経るうちには、いつの間にか佃作地を自己の所有に歸してしまふ。勤勉と才覺をもってすれば、小資産を着々と蓄積する術がそこにはあったのである。

では、より具體的に、彼らが開墾した土地に生産したものは何であったのか。小貿易で取り扱った商品は何であったのか。先述の曾氏の瓜の種は別として、桐を植えたことはいささか伺えるものの、直接的な資料はあまりない。推測の一助として、一般的に雲陽の土産としてあげられるものをいえば、桐油、茶、木耳、牛羊皮、ソーダ、イオウといった山貨であり、特に桐油は清末から民國期に輸出品として有名になつて⁽²⁵⁾いる。

雲陽縣を離れ、更に北へ行くと開縣である。大巴山をへだて、もう陝西省と境界を接するというあたりに、雪泡山、靈官廟という地名がある。ここでは、四川省の特産である藥材の内、最もポピュラーなものの一つである、黃連と厚樸の大規模な栽培がなされている。

藥材の地道行遠なるもの、厚樸、黃連の兩種なり。老林久しく闊かれ、厚樸、黃連の野生なるもの絶えて少なし。厚樸の樹は則ち栽成にかかる。小坡、平壩中に筆筒あり。厚樸はその小を言うなり。樹うること數年、十數年に至り、

杯の如く、筥の如きもの則ち好き厚樸なり。黃連は既に關きし老林の山凹、山溝中に栽種す。商人、地數十里を寫し徧くこれを栽す。十年を須ちて方めて常年の佃と成る。棚戸の一厥を守連するは輒ち數十家。大抵山愈高く、谷愈深ければ則ち産する所更に好し。雪泡山、靈官廟一帶、連厥甚だ多し。⁽²⁶⁾

移民の流入により、山區の開発がすすむにつれ、野生の厚樸、黃連を大量に採取することは不可能になっていた。そこで商人資本をもって、數十里に渡る山地に藥材園が經營されたわけである。成長するのに十年はかかるという、この藥材の育成管理をしているのが棚民であった。

棚民とは、賤民視されている山區の移住農業労働者で、簡単な小屋がけをして住んでいるためこうよばれるが、通常、雜糧を借用して開墾し、收益がなければまた他所へ徙るという流動的性格をもっている。これに對し、既に田産を所有した有業の移民は客民、新民と呼ばれている。⁽²⁷⁾一口に移住民といっても、その中には歴然と階層分化がみられるのである。

ところで、移住労働力を吸収する、この藥材園を開設した生藥商人の出自は、殘念ながら明記されていない。傳統的に藥材業を獨占しているといわれる江西の商人であろうか。それともこの時期、四川における活躍のめざましい陝西商人の資本であろうか。今は不問に付す。

黃連、厚樸は雲陽縣においても産出されるが、このような商人資本による藥材園の經營がやはりあったのであろうか。今のところ資料からは見出せない。雲陽縣において、大量の労働力を吸収しえる大きな産業といえは、縣北雲安鎮の鹽業であった。

四川において産鹽の地は數多く、四十州縣にものぼる。もっとも、時代によつて産量を誇る地區も變遷するのであるが、一般的に清の雍正、乾隆年間には川北の射洪が、道光以降は川南の犍爲、富順の鹽場が、その名をふるっている。歴史的に名高い大寧等、川東の鹽場は、清代にはむしろふるわないのであるが、その中にあって、この雲陽縣の雲安の鹽場のみは、十五の廳、州、縣に行銷され、地理的條件がよかったのか「川鹽濟楚」の清末にも増産をみ、⁽²⁸⁾民國に入ってから、

全省の鹽場を五級にわけ、二級にランクされている⁽²⁹⁾。そしてこの鹽場を資金、人材の両面から支えてきたのが移民であつた。

鹽商は黃州の人多し。拽水夫もまた黃州の人これに尸^{にん}ず。竈房の雜雇は則ち忠州の人。照火は尤も忠州の人の專業にして它籍の屬^{まさ}る能わざるなり。推だ跑井のみ論ぜず⁽³⁰⁾。

ここに拽水夫とあるのは、鹽井から鹽水を汲み上げる勞働者である。雲安の鹽井では釣瓶式の汲水方法をとっていた。墜落防止の太綱を腰にまいた二人が向きあつて、汲桶を上下させる。汲水工の手足は、長期間鹽水につかつてシワがより、皮もむけ、一目でわかるといわれるほどで、一日三十六交代（後に八十二交代）の輪番制になっていた。常雇いの「拽正水」と臨時工の「拽代水」の二種があるが、湖北黃州籍のものがその職務を獨占していたわけである。

燒鹽を行う竈房の業務は、忠州人の專業となつていたというが、同じく川東にあるこの忠州もまた產鹽地である。燒鹽業務の経験は豊富であつたろう。地元の鹽業の不振が、より大規模な雲安鹽場に彼らを走らせたのであろうか。「跑井」とは監視、巡查の役で、これは出身地を問われることがなかった。

ちなみに雲安鹽場において、黃州人は帝王宮を、忠州人は萬天宮をそれぞれ同鄉會館としていた。しかし、出身地別にかく業種の固定化⁽³¹⁾がすめば、同鄉會館はやがて同業會館の色相を濃くしていったであらう。

ところで、移民は鹽場の勞働力としてあるばかりでなく、經營にも深くかかわっていた。

縣北雲安鹽場、その大姓は曰く陶、郭。皆湖北黃岡の人なり。蜀に遷りてのち、俱に鹽竈、煤礦を業とし、世々その利を食み浸く以て家を潤おす。田廬、滷井、資は皆鉅萬⁽³²⁾。

ここに鹽場の有力者として挙げられている陶、郭二姓は、ともに湖北の黃岡出身であるが、郭氏は乾隆中に、陶氏は乾隆の間に雲安場に入り、鹽業に携さわつてきた。折しも、乾隆年間、雲安場で鹽井がその數を、顯著に増加させた時期である。

雲安場の鹽井は、四川の他の鹽場と同じく合資經營が主である。一井を若干の「架」に分け、「架」ごとにまた股分を分かつ。大井であれば、二十餘架にも分けられ、一架が更に二十股、三十股と分有されるのである。⁽³³⁾

「鹵股を購うは買田に勝る。責息速やかにしてかつ厚きを以てなり」といわれるように、収益率の高い鹽井の股分を購入することは、餘剩資金を有するものにとって恰好の投資であった。

乾隆九年、湖南長沙から入蜀した胡氏は、最初、農に力め殖産を計ったが、嘉慶の白蓮教の亂に遭遇し、一時湖南に避難していた。亂が平定され、再び雲陽に戻ってからは鹽場に移住、商業に従事し、「羨金があれば、鹵を購ひ、田を買⁽³⁵⁾」蓄財したのである。先述の黃岡出身の郭氏も「歳に贏積あれば、輒ち田、鹵を購ひ、その收入を増⁽³⁶⁾」して、鹽場の實力者となつていった。

また、鹵股を購入することにより、井權を所有した井主の多くは、「脚竈」と呼ばれる竈房を持った（合資經營の鹽井と違い、竈房は獨資が多い）。竈房においては、自煎する場合も、租金をとって賃煎させる場合もある。賃煎の場合、一年契約で租金を定めるが、多くて百兩強、少なくとも七、八十兩というのであるから、脚竈の所有も結構な恆産とみなされていた。⁽³⁷⁾

ところで、從來、雲安場では、煎鹽の燃料として柴を使用していた。やがて林木の不足をきたしてからは、石炭を使用するようになっていった。雲陽縣は石炭も豊かだったのである。竈房から排出される石炭灰の山は、累積されて川邊の碼頭となった。絶えず残り火があるため、無宿者はそこで暖をとり食事を作る。貧しい婦女子はこぼれた石炭を拾い生計をたてる。かような光景が雲安鹽場の日常であつたのだ。⁽³⁸⁾

鹽場の富者陶氏は、鹽井だけではなく、炭鑛をも所有していた。陶氏の「吉慶煤礦」といえば、その一帯で最大級のものであつた。⁽³⁹⁾

譚錫奎字紹亭、原籍湖南茶陵州。先世流徙して縣に至る。貧にして籍るなし。弟兄三人、湯溪の煤礦のために鑿運

の役に供さる。乃ち兩兄に謀り、自ら煤洞を開き多く煤脈を得、かつ饒たり。これにより殖産日に沃んさかふにして遂に富人となる。⁽⁴⁰⁾

雲安鹽場において、鹽により起家したものは、先の陶氏、郭氏を筆頭とするが、石炭によって隆盛となったものは、この譚氏と蕭氏（忠州人？）といわれている。炭鑛の開発は多くの勞働力を吸収するとともに、譚氏のように無産の者が一山あてるチャンスをも提供していたわけである。

炭鑛や鹽場はまた大量の運輸勞働者を必要とする。雲陽において石炭、鹽の搬出に利用される駄運、船運に従事する者は「無慮萬數」と形容されるが、駄幫は水府廟、あるいは馬王廟を會館とし、船幫は王爺廟を會館とし、その勢力は無視できぬものであった。⁽⁴¹⁾ 移住勞働力の吸収がここにもあったことは想像に難くない。

ちなみに雲陽縣でも、他縣と同様に城内から各鎮に至るまで幾つもの同鄉會館（江西幫—萬壽宮。湘幫—禹王宮。廣東幫—南華宮。福建幫—天上宮等）⁽⁴²⁾ が建立され、移民雜居の様がよく知られるのであるが、客籍の増加にともない、新たに入甲するものは、「幫費」を支拂うのが例であった。この幫費の管理を含め、橋梁、道路建設等を唱議し、果ては訴訟の調停まで、地域社會のまとめ役として推擧されるのが「鄉約」であった。湖南出身の曠氏、麻城出身の戴氏、いずれも名鄉約の譽を残している。⁽⁴³⁾

さて、四川省において、石炭は主要には川東、川南に分布している。移民と炭鑛との關係は、重慶に近い江北縣にも見いだすことができる。

江北縣二岩に復興隆という炭鑛が今なおある。⁽⁴⁴⁾ 一九六一年の日産量約二百t。坑道七kmの炭鑛であるが、嘉陵江流域では最も優秀な炭質を誇るといふ。この炭鑛の創業は乾隆六年（一七四一）にまでさかのぼる。

復興隆は最初、甲子洞と呼ばれていた。創始者の周世瑜は原籍湖南邵陽の人である。雍正四年（一七二六）、巴縣知縣に任ぜられた族兄周世元が、手紙で巴の土地の肥沃であることを知らせてきたため、雍正九年（一七三二）、家族をつれ合

川縣に移り、農商兼行で蓄財を謀ったという。乾隆六年、江北二岩の山地二十石を購入し、開墾したところ、炭鑛を發見。附近の農民を雇い採掘を始めたのである。質もよく、埋藏量も豊富なため、代々周氏の産業として成長していったが、その發展には周世瑜の孫、周興魁の經營手腕に負うところが大きかった。

彼は積極的に販賣ルートを擴大し、地元の酢房に販賣する外、川北の射洪、遂寧、蓬溪等から鹽、糖、酒を運送してき、回船を利用して、折り返し燃料の石炭を販出したのである。周興魁の子周隆盛の代には、重慶に豐盛和炭號を開設して、販路を更に開拓し、礦工も七、八百人となっていた。道光二十八年（一八四八）、周隆盛の死後、四房の共同管理となり、興隆公炭廠と命名した。現在の復興隆の名は、一九三九年に株式會社となつてからのものである。

周氏の場合、移住のきっかけが、地方官であつた族兄の示唆であつたというのは興味を引かれる。地方の情報収集に有利であつたのは、やはり客商と地方官であつた。

同じく江北の東陽鎮において、炭鑛を開設した高鳳榮は、江西瑞州府高安縣の人であり、乾隆年間に入川していた。のち重慶の桂花街に移住して裕記通鹽號を合資で經營している。彼において特記すべきことは、江北の地で入信した天主教徒であつたことだ。

『聖教入川記』には、乾隆前後の天主教徒として、四川各地の六十家族ほどの名が擧げられているが、その殆んどは、清初の移民である。しかも大抵の教徒が、入川以前にもう信徒であつたことを思うと、移民の入川は確かに天主教の入川でもあつたわけだ。

重慶に著名な天主教徒として羅姓の家族がいた（移民か土着か不明）。城内の三牌坊に錢鋪を開き、銀錢兌換を業としていた。やはり信者である張氏と姻戚關係にあつたが、張氏は康熙年間、湖廣より重慶に移住した人物で、羅氏から綢緞織造の技術を學び、これにより發財した。道光時代には巨富を形成したという。

同じく羅氏と姻戚關係にあり、乾隆四十年に信徒となつた李氏は、江西より入川したものである。當時、重慶城内に綢

緞鋪三家を所有し、屋敷の一室をミサのための教堂にあてていたという。湖廣より江北に移住してきた全氏も信徒であり、後に重慶で機房を經營し、綢緞を織造していた。奇しくも重慶の有力な天主教徒は機房經營に集中しているが、各地の移住教徒の職には、藥鋪經營も農業もある。⁽⁴⁷⁾ただ、これら信徒の多くが、數次にわたる彈壓の中で、投獄、流刑の憂目を見ていることも、移民の側面である。

三 川 南（砂糖）

長江を重慶よりさらに溯り、瀘州と宜賓の間に位置する南溪縣は、北方七十里に富順縣自流井という一大鹽場を控え、その縣域はやはり、江をはさんで南北に廣がっている。

ここ南溪縣もまた、明末以來の兵亂に「土虛しく人無し」という有様を呈し、復興の號令がかけられたのは、康熙三年（二六六四）、知縣李呈芳が⁽⁴⁸⁾城市を開墾し、民に武器を捨てさせ本業に歸らせてからであった。この時、城中の人士で里に歸ったものは七家だけであり、舊家は殆んど残っていなかったという。二十年後、湖廣、廣東、福建、江西の民が紛々として入植し、地に標^{しるし}をして報告し、官はそれに對して聯單を給したのである。

當時、地價はまことに安く、鶏一頭、布一疋で數十畝の田を買った者もあり、田が廣すぎて耕やせず、佃戸もいないので人に贈ってしまったという者もいたそうである。

戸口は順調に増加し、雍正七年の報告では糧戸二千五百十一戸とあったものが、乾隆六十年においては一萬四千五百四十戸、嘉慶十五年には三萬四千七百十四戸という伸びをみせている。⁽⁴⁹⁾先にみた川東の雲陽縣と、近似した規模と伸びである。

移民の中では、湖廣出身者が大多數を占めるが、中でも原籍を湖北麻城縣孝感とするものが最も多い。これは南溪縣に限らず、他の縣でもいわれることであり、確かに一つの目を引く現象である。⁽⁵⁰⁾各省からの僑民は、當初、通婚も同郷人の

南溪縣氏族表

始遷時 原籍	清以前	清初	順治	康熙	雍正	乾隆	咸豐	不 明
湖北	7	8	8	21	1	2	2	
湖南			1	8		1		
江西	2			1		1		
廣東					1	1		
福建						1		
其他	2		1	1				
不明		1						1
合計	11	9	10	31	2	6	2	1

— 民國『南溪縣志』卷4 禮俗氏族より

間でのみ行い、習俗を同化させることはなかなかしない。

土着の人間も移民を排斥しようとしたが、その力は弱く、敵うものではなかった。そして、雑居する客民間の秩序を保つためには、「客民の長」、すなわち「客長」というものが設けられていた。⁽⁵¹⁾

南溪縣は大江に濱していながら、順治、康熙の間にはまだ交通もあまり盛んでなく、開墾の居民も、衣食に汲汲としている有様で、粟を武器に易え、それを賣って家畜を買うという素朴な交換經濟が成立していた（少數民族との取り引きを思わせる）。局錢（康熙七年、成都に開局し鼓鑄されている）が通用し始めたのも、乾隆の末になってからという。⁽⁵²⁾

とはいえ、素朴な經濟環境の中でも、移民はその出身地の經濟レベルを自ずから反映させていく。山がちで、山あいには狭長な平地があるだけとい

った南溪縣の地形の中で住みわけて、土着の民とは、農業經營のあり方にも顯著な違いをみせている。

土着の民は多く山に依りて田を耕やし、新籍の民は多く河に臨み地に種える。地に種える者は、烟を栽し、蔗を植える。力較田より逸く、而して利或いはこれに倍す。然れども、力田の子弟は利微かなるも敢えて懈たらず。種地の子弟は、利厚くして驕り易し。これ又農事中の本末の辨なり。⁽⁵³⁾

傳統的な水田耕作を、山間部で行っている土着に對し、移民は河岸にタバコ、砂糖キビを栽培し、勞力をかけずに、土着に倍する利益をあげていたのである。

すなわち、長江の北岸、縣城をはさんだ東西兩保の一帶は、その沙質の土壤がタバコ（菸草）によくあい、一面に栽培されていた。最初は縣内を市場にするだけであったのが、ずっと下って民國初期には湖北にも運銷するようになったとい

う。⁽⁵⁴⁾そして、河岸の沙質の土壌は、砂糖キビにも適したものであった。

濱江兩岸は、土、蔗を種えるに宜し。熬煉して糖を成し、各地に運銷す。父老相傳うるに明代有る無し。清初、粵人の遷來する者衆し。始めて故郷より種を攜えて蜀に來る。百年遞衍して遂に大宗となる。縣中、富室の戸は多く製糖を以て起家す。⁽⁵⁵⁾

明代にはなかった甘蔗が、清初になって、廣東籍の移民によって、四川にもたらされたものである。これをみれば、移民の經濟活動にはまことに大きなものがあるといわざるを得ない。ちなみに、「氏族表」からみるに、南溪縣における廣東籍の移民は、縣東の留賓場の曾氏（始祖維鳳、乾隆二年に遷居）と、長江の北岸にある羅龍場の謝氏（始祖維翰、雍正五年に遷居）である。兩氏あわせて、民國にはその子孫が千五百餘人にもなっている。⁽⁵⁶⁾

ただここで、少し注意しておきたいのは、四川省に、從來全く甘蔗栽培の経験がなかったとはいえないことである。北宋の『糖霜譜』には、唐代、鄒和尚という僧が四川の遂寧に造糖法を傳えたという傳説をのせている。⁽⁵⁷⁾『天工開物』では甘蔗に二種あるといい、一種は福建、廣東に栽培されているもの、もう一種は四川で栽培されているもので、これは西域から傳來したものとしている。⁽⁵⁸⁾とすれば、明代においても四川には甘蔗栽培はあったわけで、ただ南溪縣にまで普及していなかったということなのか、在來種と異なる廣東種がもたらされたということなのか、恐らくこの二面を含んでいるのである。

甘蔗の植え付け期は春分前後で、收穫は冬至前後である。甘蔗栽培農家（青山老板）は、初春に製糖業者（霜戸）から前貸をうけている。⁽⁵⁹⁾製糖業には「糖房」と「漏棚」の二種がある。收穫された甘蔗は、糖房に運び込まれ、ここで牛力によって搾汁し、煮つめて濃縮し、原料糖（糖精）が作られる。黑砂糖（水糖、紅糖）もここ糖房で作られる。原料糖を更に精製し、最終的に白糖にまで加工するのが漏棚である。

精製された白糖は、上は嘉定府、眉州に、下は重慶、萬縣に運銷され、結糖（白糖精製の後作られる二次產品）は湖北の

宜昌、沙市に運銷される。道光から光緒までが最盛期で、糖精の産額は五、六百萬觔にのぼったという。清末、糖税の増加により、産額は激減してしまった。

ところで、四川全省からみれば、産糖の區域は四十三縣にのぼるといふ(民國期)。中でも主要な産區は、内江を中心とする沱江流域であり、今でも、ここは全國的に主要な産糖區となっている。⁽⁶⁰⁾ 南溪縣の産糖は、その發端に連なると考えていいだろう。

また、縣北には炭鑛が多く、炭鑛主から運炭夫まで、石炭によって生計をたてているものは五、六千人といわれる。

曾氏は劉家場に布居す。その初め多く力農販炭を以て業となす。而して合堰の曾氏は最も富貴なり。兄弟六人、歲收租穀三千餘石。⁽⁶¹⁾

この産炭地である劉家場に住む曾氏は、康熙七年、湖廣から移住したものである。掘りだされた石炭は、縣内で消費される外は、鄰接の富順縣に運銷された。⁽⁶²⁾

富順縣自流井に近い南溪縣からは、様々な物資がこの大鹽場に送り込まれている。石炭、穀物に始まり、鹽場で大量に消費される竹材。⁽⁶³⁾ 雲南、貴州から自貢に動力として購入されていく牛の市も、⁽⁶⁴⁾ 南溪で盛んであった。これらの物資の流れの中に移民がどれほどタッチしていたものか、全容を畫くことはできないが、南溪縣もまた、蓄財の種にことかない土地柄であったことは、了解できる。

四川 西(紅花、タバコ)

瀘州から沱江に沿って溯ると、内江、資中諸縣を経て、簡陽縣、金堂縣に達する。この一帯から成都平原にかけては、四川省の中でも最も肥沃な地帯であり、開發の歴史は古い。

しかし、國初の「戸口稀少」という現象は、この一帯も例外ではなく、「獻賊蜀を亂して自り、本境(金堂縣)禍に遭

簡陽縣氏族表

始遷時 原籍	清以前	康熙	雍正	乾隆	嘉慶	道光	不明
湖廣	52	19	4	12			45
廣東		10	5	17			13
江西	1	3	1	4		1	5
福建		2	1	1			1
その他	1	4		1		1	1
不明	2				1		6
合計	56	38	11	35	1	2	71

——民國『簡陽縣續志』卷10
士女、氏族表より

うこと尤も慘たり。兵燹之餘、居民、子遺ある靡し。……故に本境の人民は多く他省自り遷來する者なり。」と、移民の足跡は隨所に認められるのである。

『簡陽縣續志』の「氏族表」⁽⁶⁶⁾には二百家あまりにのぼる氏族の原籍、世系表が列記されている。その内、原籍不明の九氏を除いた内別けをみると、湖廣出身が六四%、廣東出身が二一%、江西七%、その他七%となる。但し、湖廣出身を稱する中の四〇%は明代の移住者であり、三四%は移住時期不明である。

そこで明代の移住者は全て土着とみなし、移住時期不明のものは排除して、明白に清代の移住者とされているもののみで、割合をとり直してみると、明白に清代の移住者とされているものは、江西六%、福建三%、その他四%となり、廣東籍が湖廣籍に匹敵するほど多いことが分る。

と、土着三九%、湖廣二五%、廣東二三%、江西六%、福建三%、その他四%となり、廣東籍が湖廣籍に匹敵するほど多いことが分る。

鄰接の金堂縣でも、楚籍約三七%、粵籍二八%、閩籍一五%、その他二〇%という結果が出されていることとあわせみれば、廣東籍が湖廣籍に匹敵するほどの數を占めていることは、川西の移民社會の特徴といつていいだろう。成都近郊には今なお廣東語の話されている村があるという。⁽⁶⁸⁾

ところで、沱江流域は、前述の甘蔗を始め、烟草、棉花、染料といった經濟作物の豊富な地帯である。移民の活動も、これら經濟作物の栽培と無關係ではありえない。そして、その最初はやはり、商業行爲をしながらの出稼ぎ的移入であった。典型的な例をみてみよう。

魏吉康は廣東長樂の人である。五人兄弟の三男であったが、家が貧しく傭牧をしていた。十六歳の時（雍正二年）、四

川に行けば生計を謀ることができると聞き、單身簡陽の江南鋪に至り、一年後には商賣の餘金をもって親元に歸った。再び簡陽に戻り商賣をしたが、兼ねて耕作もし、二年後、また積金をもって原籍に歸った。しかし家事の支持しにくいことを思い、原籍の祖業は伯父に託して祭田とし、遂に一家で簡陽に遷居した。⁽⁶⁹⁾

胡軻尙もやはり廣東長樂の人である。乾隆初、七兄參尙とともに、族兄安向を頼って簡陽に入った。傭工や商賣で生計をたて、勤勉儉約の末、わずかばかり蓄えができると、それによって佃業耕作を始めた。母の死に際しては、歷年の蓄えをもって原籍に歸り、喪葬ののち、六兄夫婦を伴い再び簡陽に歸った。十年ののち分居し、初めて結婚する。晩年には簡陽縣のみならず、金堂縣にも田産を置いた。⁽⁷⁰⁾

胡正楷は胡軻尙の曾孫である。十四歳の時、金堂縣趙鎮で計算を學び、數年ならずして内江花幫の經理となった。客商の信用も厚く蓄財もできた。四子は増生となっている。⁽⁷¹⁾

ここにあげた魏氏の例でも、胡氏の例でも、家族の大部分は原籍に残ったままで、身輕な末弟が同族や同郷の傳手を頼って四川に入ってきている。傭工や行商で貯えができると、原籍にもち歸ったり、蓄えが押金をまかなえる程になれば、佃田耕作を始める。佃戸になることは、居留先に腰をすえ、白手起家する第一歩といえよう。移民としての社會的地位をコツコツと上昇させていくこのようなパターンは、先に川東でみたのと全く同じであるが、東南アジア等へでいった華僑のパターンにも通じるものがある。

周鴻禧（雍正六年の生れ）祖一憲、父登標が清初に湖南永州府より簡陽に移住。十五、六歳の時から家業をついでいたが、負債が頗ぶる多かったため、奮發して耕作のあいまに兼ねて商賣を始めた。紅花の販賣である。乾隆から嘉慶の五十年間に銀六萬金あまりを積み、田産を五十餘回も購入した。⁽⁷²⁾

周俊有 原籍湖南邵陽縣。雍正年間祖父宗俊の代に、簡陽に移住。二歳の時に父が死に、伯叔に育てられる。嘉慶の間、盜匪が起り、郷人は紛々として城内に避難したが、俊有のみは相變らず子弟を率いて耕作し續けていた。

是より先、紅花は吾が簡の出産の大宗なり。閩、廣の洋商、咸遠く來りて購う。近ごろ變亂に因りて碾戸なし。俊有は賤價を以て廣くこれを收む。月餘、賊遁れ去る。郷人始めて歸る、田は盡ごとく荒蕪、而して俊有の收穫は倉に盈ち、紅花もまた厚利を獲る。家遂に小康なり。⁽⁷³⁾

この二人の周氏の記事によれば、乾隆のころ、簡陽の最大の土産は紅花であつた。周俊有は變亂期に、捨て値で紅花の加工場を手に入れたのである。福建、廣東の洋商が買い付けにきていたというのであるから、輸出品でもあつたわけだ。

民國『簡陽縣志』には「乾隆志」を引用してこうある。

紅花州、花は染め采る。その朱孔^{ははだあきつ}陽なり。河南、川北等處に甲たり。近來、花は賈僞多く、その價遂に減ず。計るに惟だ僞を去り眞を存するのみ、當年、土産の盛を復する可きに庶からん。⁽⁷⁴⁾

僞の紅花が出回つて、信用を落すほど、その商品價値は高かつたわけであるが、四川の紅花栽培には、明代から、相當大規模なものがあつたと思われる。

そもそも紅花は、夏に開花するが、早朝、露のおりている間に採取しなければならないとされる。當然、一家の勞働力だけでは間に合わないのであるから、短期的な勞働力の集約があつたはずである。⁽⁷⁵⁾そして明代の『二刻拍案驚奇』卷四

「青樓市探人踪 紅花場假鬼鬧」の中に繰り廣げられる、凄慘な殺人事件は、他ならぬ、四川は新都縣の、楊氏（楊廷和、楊慎の一族か？）^(補註)の經營する大規模な紅花園（千餘畝といわれ、客商が休むための部屋もあつた）が舞臺であつた。

また、紅花には税銀もかけられ、成都府で徴收されていた。乾隆二年、資州、資陽で紅花を買いつけた商人が、成都にまで報税に行くのは回り道であるとして、内江に税口を置くよう提議されている。⁽⁷⁶⁾

しかし、最大の產品とされていたこの紅花も、清末になると、急速に衰えていった。

光緒以前、花を採り淘淨し、碾爛して顆を作り、以て染料となす。遠商雲集し、歲にその利を擅らにす。故に花は畦隴に徧ねし。洋紅出でて自り、その價廉きに因りて遂に奪う所となる。種える者、百の一、二。僅かに藥品に供する

(77)
のみ。

安價な洋紅におされたのが、衰退の原因であつた。「咸同以來、競いて洋紅を尙」ぶというから、このころ凋落したものであろう。清末、王增祺は「紅花謠」⁽⁷⁸⁾を作り、紅花に變つて簡陽で、紅色を咲かせるようになったのは、鴉片の罌粟花であると、その感慨を歌っている。

また、簡陽では、乾隆のころ、紅花よりも遅れてではあるが、棉花の栽培も始まつている。

州屬、多く紅花を種える。今（乾隆）則ち漸やく棉を種え、その利の紅花に倍するを知る。

咸豐のころには「棉花は州産最も夥し」といわれ、水陸兩路から崇慶州、彭山、資州、内江各地に運銷されたようである。⁽⁷⁹⁾先述の胡正階が經理となつた内江の花幫とは、この棉花取り引きに關するものであろう。

甘蔗も「沿江の民、蔗を植え糖を作る。州人多く此を以て富を致す。」⁽⁸⁰⁾とあるように簡陽の重要な經濟作物であつた。

但し、乾隆のころには糖房があつただけであり、ここで作られている糖は紅糖である。白糖を作る漏棚の經營は糖房より資本がいるという。あらかじめ糖房から糖精を買い付けておかなければならないからである。

簡陽の漏棚は、道光の初め、曾姓によつて江岸に修建されたのが最初という。ちなみに「氏族表」によれば曾氏は五支あるが、いずれも原籍は廣東である。曾姓の漏棚はうまくいかなかつたようで、光緒末に陳姓が建造して厚利を得たという。清末から民國にかけ、白糖を造成するものがやと多くなつた⁽⁸¹⁾というのであるから、川南の南溪縣に比較して、その普及は遅いようである。簡陽では白糖は資州、内江から運入していたのである。

タバコの栽培は沱江流域に盛んにみられ、簡陽縣でも産するが、縣内で消費する程度であり、何といつても鄰の金堂縣が有名である。

傅沐榮は江西瑞金の人である。雍正七年（一七二九）、湖南を経て金堂縣趙家渡にきた。佃田し、諸子に力農させて手廣く烟草を種えた。當時、四川ではまだ烟草の栽培は習熟されていなかった。しかし、滿蒙八旗の弁兵の必需品であつたた

め、一時、傳姓の烟草が錦城（成都）で珍重されていたといふ。⁽⁸²⁾

もと、タバコは明の萬曆中から福建で多く種えられ、各省に傳えられた。康熙、乾隆中にしばしば禁令が出されたが絶えることなく、嘉慶、道光以後は全國的に普及したといふ。⁽⁸³⁾ 雍正七年の移民によつてもたらされたといふことは、全國的にみて早い受容といえようか。ちなみに傳姓のタバコの消費者は成都の滿蒙八旗といふことであるが、成都の城内に滿城が築かれたのは康熙五十七年のことであつた。⁽⁸⁴⁾ 金堂縣のタバコは、のちにその行銷地を他省にまでのばしたといふ。⁽⁸⁵⁾

ところで、福建が國內におけるタバコの發生地であるだけに、その取引きに關しては、福建が牛耳っていたようだ。川東の雲陽縣にも時代は下るが、その活躍がみられた。

烟草を業とする者、閩人多し、賴、盧諸姓は皆に清中葉に來り、その業を以て縣（雲陽）中に名あり。利頗^{ゆたか}ぶる饒。⁽⁸⁶⁾ 今多く土人これを承く。烟草は金堂諸縣に出で、渝、萬より轉運す。近ごろ利益ます薄きも、なお他業に勝る。

金堂縣のタバコは、重慶、萬縣を経て、雲陽にまで搬入されていることがよくわかる。雲陽のタバコ業は、福建からの移民である賴氏、盧氏が牛耳っていたわけであるが、盧氏は砂糖もあつかつていた。

盧牟 字晉三、原籍福建汀州。道光中、父に隨ひ縣（雲陽）に來る。時に縣中商務正に著^{しげ}し。凡そ客籍皆利を獲る。

盧氏は兼ねて烟草兩店を營なみ、大いに蓄うる所あり。皆閩に寄せて田宅をかう。而して縣に在りて更に姻婭を締^{むす}ぶ。後留まるに隨いて去かざるなり。牟は開敏弘綽、廣く交遊し、上は嘉（定）、鉞（州）、瀘（州）、渝及び資（州）、内（江）諸縣に達す。烟草兩業は皆鄉人の交買するあり、聲氣呼應し利率自から倍す。⁽⁸⁷⁾

元來、客商であつた盧氏は、雲陽に定住してからも、その交易の範圍は廣く、タバコ、砂糖の買付けには、沱江地域にも足をのばしている。

康熙、乾隆までを一つのピークとして、集中した移民が定住するにつれ、四川においては少なからぬ場市が新たに開設された。清中葉以後、省内の商業活動はことに活發となり、客籍のものが大いに利益を得たといふ。盧氏が雲陽に入つて

きたのも、この商業活動の高まりにのつたものだった。それはとりもなおさず、清初の移民の成果といえるかも知れぬ。

おわりに

清朝が國初に意圖した四川の荒土開墾は、すみやかに成果があげられ、康熙五十二年には、「今、四川の荒田已に盡く開墾さる⁽⁸⁸⁾」といった表現が、成都附近を中心にとられ始めている。しかし、乾隆年間にもなお續々と移民の波は續き、ピークを形成していることは既述の通りである。移民の活動は王朝の開墾政策をのりこえて、はるかに多彩にくり廣げられていった。

移民活動は當初から、商業行爲と堅く結びついていた。移住の當座は出稼ぎ的なスタイルをとることが多く、資本に恵まれない移民は、行商により資金を貯え、佃田耕作の手がかりを作ることが先決であつた。原籍の産業を賣却し、何がしかの資本を攜えていたものも、自己の産業を更に擴大するためには、積極的に經濟作物の栽培を行い、自ら販賣(行爲も行なう。

移民が原籍の經濟レベルを反映し、從來の四川になかつた、タバコ、砂糖キビの栽培、砂糖の製法等を傳えたことは、四川經濟にとって新たな可能性をひらくものであつた。そこには前貸しの形態がとられていることも伺えるし、移住勞働力を組織して大規模な農園經營をする商業資本の存在もみられる。

移民の活動が農業にとどまることなく、鹽井や炭鑛の開發にも向けられていたことは、注目されている。四川において、長い傳統を持つ鹽業でありながら、移民がかく參入しえたのも、土着の持たぬ資本力を移民が持っていたからであろう。

また清朝の鹽業管理は四川においてゆるやかであり、治安に影響のない限りは、民間の自由開墾にまかされていたこと⁽⁸⁹⁾と、炭鑛もまた、他の五金の鑛山と違い、王朝の封禁令がなく、民の自由な開發が許されていたことも大きかつたであらう。

う。⁽⁹⁰⁾そして炭鑛の盛んな開發は、燃料を大量に消費する鹽業、糖業、釀造業の活潑化を裏付けることでもあった。

移民の力によって新たに開發された產品の生産規模も、始めは、縣内、あるいは數縣、といった省内消費にとどまるものであったが、清末から民國にまで下れば、ものによっては、省外にまで販出される成長をみせ、今日にまで續く產品の多いことを思えば、移民活動が四川經濟に加えた挺子入れは、眞に強いものであったと評價できよう。

また社會的にみても、言語、風俗を異にする排他的な移民集團の雜居は、通常の行政支配だけでは治めきれぬものをもっていたであらう。移民達は、歸屬意識を同郷意識のつながりによって滿たそうとし、土着とみなされる先住者も、前代の移民ということでそこにつながりを得ることができた。

歸屬先をもてぬはみだし者には、客民間のすき間をうめるように包哥（哥老會）の存在がやがて組織されていくことになったのであらう。それはまた四川の經濟において、特に流通面において重要な側面を占めるようになるのであるが、本稿の範圍を逸脱する。移民社會の構成等、考察しなければならぬ問題は多々あるが、ここでは移民の經濟活動の多様さを提示してしめくくることにする。

註

(1) 胡昭曦『張獻忠屠蜀攷辨——兼析湖廣填四川』一九八〇年 四川人民出版社 九〇頁。

(2) 郭松義『清代的人口増長和人口流遷』『清史論叢』第五輯

一〇五頁。

(3) 鈴木中正『清朝中期史研究』燎原書店 一九七一年

安野省三『清代の農民反亂』岩波講座『世界歴史』12 中

世 6 二〇一頁。

(4) 拙文『清代四川の鹽業資本』『明清時代の政治と社會』

(5) 嘉慶『四川通志』卷八二 武備志 武功。

一九八三年 京都大學人文科學研究所五三四頁。李四友堂の祖先是元末の移民、王三畏堂の祖先是明末清初湖北よりの移民、胡勉齋の祖先是河南人。吳景讓堂の祖父は道光十二年、湖南より入川（健樂地區首屈一指の大場商——吳景讓堂『井鹽史通訊』一九七九年 第一期による）。なお張學君、冉光榮『明清四川井鹽史稿』には王三畏堂、吳景讓堂ともにその先世は明初の移民とされている。

- (6) 同右 卷六二 食貨志 田賦上。
- (7) 『清代四川財政史料』五五頁に康熙『四川總志』卷一〇貢賦へ康熙十二年吏部爲恭報招回川民安插數目題本を引く。
- (8) 起科の年限は、その時々によって一定しない。雍正八年には荒田は六年起科、荒地は十年起科とある。『清朝文獻通考』卷二、卷三、田賦考。
- (9) 嘉慶『四川通志』卷六四 食貨志 戶口。
- (10) 同右 附李先復疏へ爲陳楚民寓蜀之害伏祈敕部嚴加查逐以恤殘黎事。
- (11) 同右 卷首之一 康熙五十二年癸巳十月丙子。
- (12) 同右 康熙五十一年 五月二十日。
- (13) 同右 卷首之二 雍正六年戊申二月甲辰。
- (14) 嚴如煜『三省邊防備覽』卷一一 策略。
- (15) 流民之入山者……西南則取道重慶、夔府、宜昌。
- (16) (17)(18) 民國『雲陽縣志』卷二三 禮俗中 農。
- (16) 同右 卷一 地理。
- (19) 同右 卷二五 土女 耆舊一 李茂亮。
- (20) 同右 卷二八 土女 耆舊四 曾毓璣。
- (21) 同右 卷二三 族姓。
- (22) 特に山地では佃租が安かった。國初に賦額が定められたが、戸戸も荒涼とし、土着の百姓には納課が困難であった。そこで外省の客民を募って地を與え納賦を引き受けさせたのであるが、その課たるや幾錢幾分にすぎず、土地の方は數里にも渡る廣さであった。客民も耕作しきれず客佃を招き、

- 數十年の間に七、八轉するケースもあり、佃戸は招主のみを知り、ついに地主が誰かは知らない状態だったという。『三省邊防備覽』卷一一 策略。
- (23)(24) 『雲陽縣志』卷一三 禮俗中 農。
- 舊田取租最輕。穫十輸五。尤輕者主四個六。山地雜植。雖略徵錢、餘潤正多。主不加租、佃亦盡力、墾荒成熟、增種桐。
- (25) 同右 卷一三 禮俗中 商。
- (26) 『三省邊防備覽』卷九 山貨。
- (27) 同右 卷一一 策略。
- 流民之入山者、……遇有鄉貫、便寄住寫地開墾。伐木支椽、上覆茅草、僅蔽風雨。……故統謂之棚民。其開荒成熟、住久有業、及小貿易營生者、漢興平壩人別之曰新民。郢宜人則稱爲客民。
- (28) 吳煒『四川鹽政史』卷二 場產 第一章 沿革 第二節 鹽產之興廢。
- (29) 同右 第三章 場區 第三節 各場之等級 一級は富榮場のみ。
- (30) 『雲陽縣志』卷一〇 鹽法。なお雲安の鹽場において鹽商は湖北黃州人が多いというが、一般的に四川においては、本地に殷實な商人が少なく、大半は陝西商人に鹽引を租借させている。
- (31) 健爲、富順の鹽場でも鹽井開鑿の匠作はすべて貴州省の人といわれる。『三省邊防備覽』卷九 山貨。
- (32) 『雲陽縣志』卷二三 族姓。

(33) 『四川鹽政史』卷三 場產 第十章 職業 第二節 井戸。

(34) 『雲陽縣志』卷一〇 鹽法。

(35) 同右 卷二七 士女 耆舊三 胡德榮。

(36) 同右 卷二六 士女 耆舊二 郭在鳳。

(37) 同右 卷一〇 鹽法。

(38) 丁寶楨『四川鹽法志』卷五 井廠五 沿革下 國朝 陶壽彭へ雲安場風土記を引く。原載咸豐『雲陽縣志』。

(39) 『雲陽縣志』卷二五 士女 耆舊一 陶啓濱。

(40) 同右 卷二六 士女 耆舊一 譚錫奎。

(41) 同右 卷一〇 鹽法。

(42) 同右 卷二一 祠廟。

(43) 同右 卷二七 士女 耆舊三 曠希賢。ちなみに清末、重慶に「麻郷約」と呼ばれる民間の運輸、郵便業があった。その名の由來は、湖廣填蜀の際、湖北麻城から大量の農民が四川に遷居したが、彼らは毎年人を選び、土産や手紙を託して故郷と連絡していた。それを麻城の麻と地域の調解のリーダーとしての郷約を合稱し、麻郷約と呼び習わしていたものからとったという。「西南民間運輸巨壁『麻郷約』」『四川文史資料選輯』第七輯。

(44) 周家鉉他「復興隆煤礦簡史」『四川文史資料選輯』第十五輯 七三頁。

(45) 『四川通志』卷一〇四 職官志。國朝職官題名によれば、雍正四年の巴縣知縣は王繼曾。周姓の知縣は周孔憲（山東人、康熙五十七年任）周仁舉（河南人、康熙六十年任）のみ。

懷憶の記憶違いか。

(46) 古洛東 (Gourdon) 『聖教入川記』 一九八一年四川人民出版社 七三頁。原本は一九一八年、重慶曾家岩聖家書局印行。Gourdon は一八六六年—一九三〇年、重慶で活動していたフランス人宣教師。四川省圖書館藏。

(47) 同右 羅氏七〇頁。張氏七一頁。李氏七二頁。全氏七四頁。呂氏は江西臨江府人、川南敘府に居住。藥舗を經營。乾隆十四年死。七〇頁。

(48) 『四川通志』卷一〇四 職官志。國朝職官題名によれば、李呈芳、遼東舉人、康熙三年任とある。民國『南溪縣志』卷二 食貨には康熙二年とされている。

(49) 民國二十六年『南溪縣志』卷二 食貨篇第四 近三百年民生消長狀況 三四一頁。

(50) 胡昭曦は「張獻忠屠蜀攷辨」の三章で、外省より入川した移民の出身地を、各地方志の氏族表に基づき計量しているが、それによると、移民氏族の中で、湖北麻城縣出身の占める割合は次の通りである。

清以前

縣名	原籍麻城縣
合川	40%
重慶	23%
南溪	25%
廣安	54%
簡陽	83%

清初

縣名	原籍麻城縣
合川	17%
南溪	25%
簡陽	51%

本稿では、清以前の移民は全て土着とみなしているが、土

着に湖北麻城縣出身と稱する氏族がとりわけ多いのは興味深い。明代の麻城といえ、李卓吾、何心隱、鄧豁渠の三異人が耿天臺を頼って寄寓していた所であり、明末には奴變の舞臺となった土地柄である。四川とどのようなルートがあったのであろう。移民は多く同郷を頼って入川してくることを思えば、特定の縣の出身者が多いということもあながち不思議ではないが、それにしても、湖北麻城出身を稱する數の多さは異常ともいえ、地方志の編纂者も大きな疑問を呈している。そこで考えられていることは、元末、四川に大夏政權を樹立した明玉珍の出身が湖北隨州であり、孝感に近かった。明玉珍とともに入川してきた湖北人の勢力が強かったため、士民も他民もその戸籍を冒稱して庇護を求めたというのである。『南溪縣志』卷四 禮俗下 六二三頁。要するに湖北麻城の出身といえ、手づるをえられ、四川では羽振りをきかせられたのであろう。

- (51) 民國『南溪縣志』卷四 禮俗篇第八下 風俗 六一九頁。
- (52) 同右 卷二 食貨篇 第四 錢幣 三三六頁。
- (53) 同治『南溪縣志』卷三 風俗 農事。
- (54) 民國『南溪縣志』卷二 食貨篇第四 物產 二七五頁。
- (55) 同右 二八三頁。
- (56) 同右 卷四 禮俗篇第八下 風俗 六二七頁、六三〇頁。
- (57) 王灼『糖霜譜』原委第一。ここにいう糖霜は冰糖である。
- (58) 宋應星『天工開物』甘嗜第六卷 蔗種。
- (59) 民國『南溪縣志』卷二 食貨篇第四 物產 二八三頁。砂糖キビ農家への前貨を示す資料として、割註に引用されている。

る、富順の陳崇哲の詩が重要である。

種得萬挺蔗

預貸十千八千錢

(種蔗者皆以春初貸錢藉戶)

始春得錢十勝千

半果飢腹半入田(以下略)

また四川における傳統産業(織錦、綢業、糖業、採煤等々)の技術的なあらましは、譚旦厔編著『中華民國工藝圖說』

一九五六年 中華叢書に詳しい。

- (60) 臺灣が日本に割讓されてからは、中國國內において、四川の産糖量が最も多く、民國八年から二十五年に至る平均年産は一百八十五萬公擔で、全國の首位であったという。内江は沱江流域において産量が多だけでなく、最大の集散市場であった。『中華民國工藝圖說』九 熬糖 一三七頁。

- (61) 民國『南溪縣志』卷四 禮俗篇第八下 風俗 六二二頁。
- (62) 同右 卷二 食貨篇第四 物產 二七九頁。
- (63) 同右 三一五頁。自流井では、その獨特な卓筒井及び硯の構造から、竹材の需要が極めて高く、四川山區のみならず、雲南、貴州、陝西、湖廣からまで大量の竹材を購入していた。南溪縣からは一年ものの刺竹、鷄爪竹が販出されていた。
- (64) 同右 二八五頁。牛市盛於清時。販自滇黔蜀之自貢。每遇集期、恆數百隻、蹄跡交迫、視為中心。
- (65) 民國十年『金堂縣續志』卷三 食貨 戶口。
- (66) 民國二十年『簡陽縣續志』卷一〇 士女篇 氏族表。

- (67) 民國十年『金堂縣續志』卷三 食貨 戶口。
 (68) 『張獻忠屠蜀攷辨』八四頁。成都の東山地帯、すなわち舊華陽縣屬の隆興鎮、保和場、西河場、三聖場、大面鋪、仁和場、得勝鄉、同興場。「土廣東」と呼ばれる客家は、先後して川南各縣で墾殖し、再び蜀北に遷居したという。
 (69) 『簡陽縣續志』卷四 士女篇 孝友 三〇五頁。
 (70) 同右 三〇四頁。
 (71) 同右 卷六 士女篇 善行 四七〇頁。
 (72) 民國十六年『簡陽縣志』卷一二 士女篇 善行。
 (73) 『簡陽縣續志』卷五 士女篇 孝友 四二三頁。
 (74)(77) 『簡陽縣志』卷一九 食貨篇 土產。
 (75) 徐光啓『農政全書』卷四〇 種植 雜種下。一傾收花、日須百人摘。以一家手力、十不充一。但駕車地頭、每旦當有小兒僮女、百十餘群。自來分摘、正須平量、中半分取。これは明代の情景であるが、清代においてもほぼ踏襲されていたであらう。

- (76) 『四川通志』卷六七 食貨志 權政。
 (78) 紅花謠

簡州四野開紅花……摘花盈擔入花棧 估客金錢攫無算……
 自從洋莊飯羹紅 花客不來花棧空……聞說栽花能賺錢 有

- 利莫如鴉片煙。(『簡陽縣志』卷一九 食貨篇 土產)
 (79)(80) 『簡陽縣志』卷一九 食貨篇 土產。
 (81) 同右 卷二二 禮俗篇 風俗。
 (82) 『張獻忠屠蜀攷辨』九六頁に民國『重修傅氏宗譜』卷一〇(四川大學圖書館藏)を引用。
 (83) 『簡陽縣志』卷一九 食貨篇 土產。
 (84) 『四川通志』卷二四 輿地志 城池。
 (85) 『金堂縣續志』卷一 疆域 一六六頁。
 (86) 『雲陽縣志』卷一三 禮俗中 商。
 (87) 同右 卷二六 士女 耆舊二 盧牟。
 (88) 『四川通志』卷首之一 康熙五十二年癸巳十月丙子。
 (89) 前掲『清代四川の鹽業資本』參照。
 (90) 『清國行政法』第二卷 第五章 產業 第二節 礦業 四一一頁 備考。煤ハ從來新炭ト同視シ礦物ノ一種トシテ之ヲ認ムルコトナカリキ……從ヒテ一般礦物ニ關スル法規ハ煤ニ適用セラレス又康熙雍正ノ開礦制禁ノ令ノ如キモ亦蓋シ煤ニ及ハサリシナラン。

(補註) 楊慎には「青樓斷紅粉之魂 白日照翠苔之骨」という文があり、人々が傳誦していたという。小説の題はこれをもじり、楊氏を中傷したものであらう。

to study the entire system of Substance and Function or the Principle of Nature and Life 性命之理, but rather to apply themselves to one task or one art. In particular, they should devise a plan of Li whereby one person specialized in "Capping and Marriage", another in "Funerals and Sacrifices" etc.

This was the main point of Yan Yuan's theory of learning. Moreover, he established a model for the realization of this ideal, and within it he allowed for the concrete practice of *Li*.

THE IMMIGRANT ECONOMY OF SICHUAN IN QING DYNASTY

MORI Noriko

At the beginning of the Qing dynasty, there was a vigorous movement of immigration into the relatively sparsely populated Sichuan basin helped partly by government policies to promote land reclamation. Since the immigrants were largely from Hubei and Hunan, the expression "The Hu provinces fill in Sichuan" (*Huguang zhen Shu* 湖廣填蜀) came into being.

Until now, this phenomenon of immigration has been looked at in connection with the White Lotus Rebellion of the Jiaqing 嘉慶 period, but its own economic activity has not been explicitly studied. Nevertheless, if we look at the reality of this phenomenon in detail, we can see that the sphere of activity extended to the entire Sichuan basin; and going beyond the intentions of the Qing government, it was heavily influenced by commercial interests.

There were various classes of immigrants. On the one hand there was a strong character of fluidity, like that of the shed people (*pengmin* 棚民), while on the other hand there were people who succeeded in accumulating capital by cultivating such commercial crops as saffron, medicinal herbs and sugarcane, and by producing salt and coal.

The activity of the immigrants brought Sichuan up to the economic level of their original home provinces, and they became a great help to the Sichuan economy.